

さよなら名古屋情報処理センター

樋口 裕嗣(校友課)

新しい時代の予兆

1988年4月三好町に愛知大学名古屋校舎が開校する前日、情報処理センターも開設準備に多くの人たちがあわただしく作業をしていました。センター入口で現文学部浅野俊夫教授(当時名古屋教養部教授)が、「樋口君。」「樋口君。」と呼ぶ声が、行ってみると「樋口君これ止めないか？」とセンターの入口に設置してあった下駄箱と大量のスリッパを指していました。

当時は情報処理センターに入るためにスリッパに履き替えることが当たり前でしたが、新しい情報処理センターの最大の使命は、多くの学生・教員に身近に使える道具として普及させることでしたので、パソコン初心者の妨げになる要素は排除することを心がけていました。

「先生なぜですか?」「これから女子学生が増えることは確実で、ここでスリッパに履き替えるだけで、女子学生は情報処理センターを敬遠する。」「だいたいコンピュータはアメリカで生まれたものだ、アメリカにスリッパはないぞ。」

その他にも、パソコンを普及させるため、多くの配慮をおこないました。汎用機がまだまだ主流の時代、通常は情報教育のためIBM、富士通、日立などの端末機を導入することが当たり前でありましたが、導入された日立製の汎用機には、日立パソコンB16を端末機として導入し、ワープロや表計算も使えるようにしました。一方、汎用機を利用しない情報教育のために、今後個人がパソコンを所有することを見据えて、パソコンマニア憧れのNECPC9801UV21を導入し学生や教員たちに大きな衝撃を与えました。特にUV21の特徴は外部記憶装置が3.5FD(フロッピーディスク)を採用、5インチFDが主流の時代に、学生たちがFDを持ち運ぶ時小さくて壊れないことを考えての導入でした。

その後もパソコン利用者を普及させるため、さまざまな試みを行いました。

学生相談員の採用・常駐

初めてパソコンに接する学生・教員に配慮して、いつでもパソコン相談ができる相談員をおくことにしました。他大学は理系の大学院生を相談員にすることがほとんどでしたが、理系のない愛知大学では学部学生の中から素養のある学生を募り育てるこ

とにしました。募集をしてみるとパソコンが趣味である学生からたくさん応募があり関係者を驚かせました。その学生たちもPC9801が自由に触れることに憧れて、採用後は目を輝かせて勉強し、スタッフとして十分戦力になり、現在でもその制度は続いています。

良い環境は良い人材を育てる

学生相談員を先頭に学生たちの「やる気のスイッチ」をいれるために、センタースタッフたちは必死ですばらしい情報環境を整備しました。

パソコン全台(50台)に「一太郎」と「ロータス1-2-3」を導入、またタイピングもままならない学生がほとんどでしたので、タイピングソフトを独自に開発し、情報科目を履修する条件として、認定証を発行し、履修者は授業スタート時には一定以上のタイピング技術が確保され、情報教育の質の向上に貢献しました。情報教育用の初心者用テキストも作成しました。

その後も、外国語教育のために、Macintoshを60台設置した実習室をつくり、極めつけは、先日亡くなったスティーブ・ジョブズが開発した、オブジェクト指向OS「NEXTSTEP」を50台導入して、全国の大学から注目を浴びました。

最後に

今振り返ってみますと、毎日、情報教育の担当教員、学生スタッフと全国一の文系情報環境を整えるために試行錯誤の連続でした。その結果、私立大学情報教育協会(私情協)フォーラムを愛知大学で開催するまでになり、情報処理センター関係者の多くが私情協の委員になり名実ともにこの地区ではナンバーワンの情報環境を持つ大学になったと思います。今でも学生相談員たちとは年に一回集まって、酒を飲み、パソコン談議をしています。「Mac OS X」「iOS」はNEXTSTEPにそっくりだとか、「NovellのNetWare」はネットワークの勉強にとっても役立ったとか。深夜まで思い出話には事欠きません。さようなら名古屋情報処理センター。



写真 開校式 左から浅野俊夫(センター委員), 坂東昌子(名古屋情報処理センター所長), 私